

披沙揀金

十二

笠

共卅四

庫文閣内			
一五九函	三四冊	三三六九號	和書類



内閣文庫	
番號	和 33169
冊數	34 (12)
函號	159 60



A 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19  
M B

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

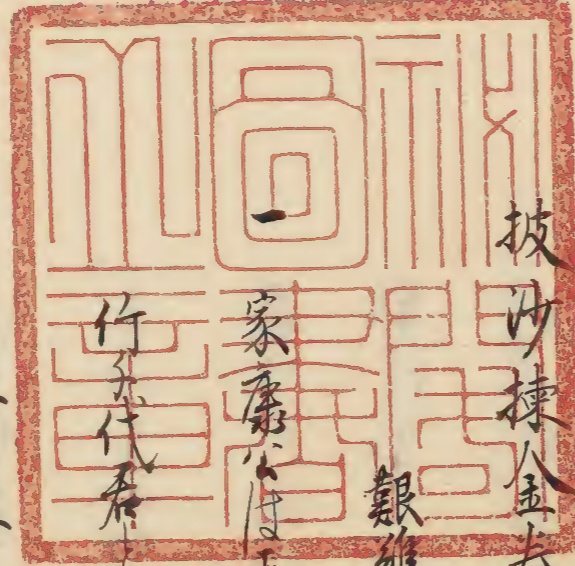




同元名号



披沙揀金卷第十二



銀維城湯經歷あり公これ候事

家康公は天文十一壬寅年参州長崎城より一市誕生此童名

竹中代君ももも湯母は同國荊谷此城より水野存母

大天忠政の娘下野と妹あり

竹中代君二葉此湯年離別あり此荊谷より送る

廣忠卿は田原城より田原三郎より為成より織田三郎

大尾州より西冬州へ働出岡崎此城を攻んとす



廣忠の駿河今川義之を加勢とせしむる依り

竹千代君の策は清時駿府へ入質し、其を以て信長へ  
志ある者も皆集りて垣を破るるに於て

竹千代君と奪あり、織田陣の方へ出し、其も彈正如何の志  
を以て、其や越田大官の方へ其志もふり、清時其母を

其以て松依渡り、其も織田の隨分は侍の妹、其は  
あり

竹千代君の策は、其を以て給へ、越田の宮へ其は清時の方へ

其及びその彈正忠の心、其は其の清菓子に衣が、其は

其は送り、其は其の心、其は其の清時面を、其は其の河津

其は其の若小なる、其は其の進上は常に其は加へ、其は其の慰め

其は其の清幼少の清心、其は其の満足、其は其の思召、其は其の忘れ不

其は其の清幼少の清心、其は其の満足、其は其の思召、其は其の忘れ不

岩淵夜  
話別集

一 天文十八己酉三月六日

竹千代君の策は清時の方へ

廣忠の駿河今川義之を加勢とせしむる依り、其は其の清時安祥に城と



織田彈正のしるしに攻取揚子二郎六郎大隅守信康と指  
墨うるは故今川義元駿遠之にこの國の勢をふるも痛く攻ら  
しめし付城中防衛す既に落城し及仕合ふれば彈正  
方より扱と入

竹中代君と云ふ二郎と取替度と有し付我元收まを斜  
やうて

竹中代君は法取多中六業は清時不意に款のふに清  
渡り出四年九歳に時追他國の清住居を交ぬの

清恙も渡りを給す此成長は二度此のゆきと  
奉ふ此清代君は我の不及中清領分在す所の所人百  
姓連も海酒と酒と祝ふやうと云ふ義元此中有り  
ぬら

竹中代未幼少の依りてはけ方より指針をそとせと云ふ  
岡崎の家老中との同心ははるる云ふも今度  
竹中代君尾州より清の海に我も偏り我元は清勢力故  
かまは如何扱ともを頼と云ふ外ははるる扱も云ふ



依

竹下代君は後府(清越)より石川伯耆大野之郎  
兵衛と外は譜代元少と相浩出で中上と外元  
は是清と存在後府北口暮一威程極き少子あり  
岡崎の城本丸と後河より城代を指す是清元少は  
島居伊賀も松平次郎右衛門阿部大藏石川右近け面二  
之れ郭に在り惣奉約の如くにありとも義元の口指場  
故信とては法事此後少も取さばく事するよしは譜

代の面、氣味毒く存不事限なく

岩淵夜  
話別集

一 島井伊賀守忠吉

廣忠より伊の公清逝去

竹下代君

東照宮  
の御事

は初年たふさゆ駿河(清)在府なり是

より同じ伊賀守忠吉も同じ臨み事今川義元は合戦  
より岡崎城のあより三河より清家(兼内)若かり  
とも城代より石川右近阿部大藏惣奉約よりは島居伊  
賀もとも松平二掃存(清)を惣別く是る忠吉在番乃



駿府府に在りて昼夜幼君を扶育しも其義之を  
幼君に扶助も其儀微少しして其衣服等其料も其  
中臺所の贖ひ都く忠告も其調進す附随の事  
衆中も貧窮なりとは常より其見達し合力も其  
父祖より家留して費用多く持すけ時悉く散り  
堪難しも救ひも  
鳥居家  
中興譜  
竹代柳は駿河河下なり其駿府少将の官に所せ案  
より十九代其年述其案其事云々ありけりあり

て小舟つかせりて其追ひ寄る事なり候原見石主水  
の原安内清守も其時をわたり其林へ入せり  
す其女はたまたま其水中より其の牌より其果なり  
と其中つる其念も思ひなりや三十七八年程経  
後遠江高天神に城を甲斐の勝頼より持り其を相  
害り其地より其廉恒や結原柵を傳へて殺せり  
時原見石も其時城を籠り其兵糧盡し切て其  
捕はけ由中より其原見石より其台昔駿府より



詰り方一付と上京の尊はるひま出ふり主水の林へ  
尊をさうさうと急下り入付る三河の将軍あま果をうら  
度りつふとさへいり主水も存るる一舌あきたる  
若かりは腹を切きよこ山根なり

三河  
物語

一丁と世間味は清城近を清野に出る成り向とま  
田を植ふ下郎とこれ中へ近友交りて自身早苗取て  
居りらる清出た見と田中一面を泥と付て見知  
らるるあまの如く扱ふと云てと云前へ清賢へ

お付たる事なれは清侍元おとは近藤はくはるま近友  
かゝらるるあまの如く扱ふと云てと云前へ清賢へ  
くまの近友力不及畏いし中て泥水はく一面を洗田れあせ  
く捧を互箕笠を掛並下に刀脇指とくま付をさへ  
く取取出し扱ふ道へ上り清前へ畏れあまをさへたる  
洪帷子れ破まてつる小縄あまをきれ神目も尚らさぬ扱子  
かたを傍輩中見と扱ひ笑止るはは合うかと各汗  
をかかへる上と思はは一向に扱ひてさくま小身るれを



き方かゝる初め家中に面くし知行加増をとりせし  
事となりしすあたな前の知行ありにけり少馬守道興の  
嗜もるゆきなりたし如故に扱く手作として自身辛苦  
おぼす事不便の次第なり今井田を隠かゝ殿しき  
業どもしして取捨しき奉りおせし我もしと前より苦勞  
ありて後より楽しき事扱く心得しうか能く早く飯て不  
せき事と仰りて是は河洞くせ給へは近藤俊いなり中川氏の  
諸人そと成るあり右洞を流し赤も存りふふかり

岩淵夜  
活別集

一 二方不攻軍れり記

神祖和路の方より井場より城と東に下番口より退ん  
と水野の道に重と殿として退かせし甲兵保庵景  
茂身玉虫次第無事とたに急し扱す我も守りて返り  
戦んとし夏月吉信は淡ねも在り城樓より登り戦場と  
登り我共甚危急なり是ハ急き馳来しり  
神祖の五ノ戦へしり少馬守道興は味方して同凡兵ら一  
拳け傍より限るしり速し淡ね入りて去給く



神祖の御言を以て回城下に在るに後軍に耻辱以  
て之を況や退く處らんや既率に變て放てし命  
給ふも放てしは能を以て蹴るを以て不吉信孝と勵  
ししは汝變を放つ處らんはさるかの馬より下を  
自變を取て身全に回身命我人よりは正夫の事なり  
進退たし身全に後軍に勝利を傳へたるはさるかに大將  
の任なりや命我捨て命に付くあり  
神祖の御言を以てしは我けを以てあふはしは  
と

と知まらば一歩も退か急ぐ追人こそ必なり吉信曰  
は踏止し律を犯しは

公代へん患のあはれあり

神祖許し給ふす吉信敢てさかき味柳助九郎武重  
を以て謂て回我を以て留て戦死せん汝其隙を  
公に護りて入城せし武重共く忠死せんし吉信固  
く制し津島を渡松方へ引向け給て以て由馬に死を  
叩き走しめ給てし律を稱しし文字槍を振ひ戦



ひ款二人を殺し從長二十餘人共々忠死せしむる  
神祖無事退き給ふも款は終幕の台軍に迫る  
その中より夫物れとて我長あり若ありとて  
神祖見ゆり叫り給ふ野中重政も我斬ふり甲兵  
愈迫る道開く  
神祖は馬進ゆり危かりに松井の松平忠次苦戦  
し腹を林の中へ息をいり居たりと見ゆり走り出  
神祖は僧て曰く

公を窺ふ

これ鑑へ朱色なり款兵目我注ぐ信小片の鑑と替  
給へ

神祖歎くく鑑と替へ給ふ忠次は鑑と云へ松平  
忠次は叫ぶく十二三務と共う返へ合て款兵と追  
け

神祖の馬も疲たると我馬も余せ奉り又款莫からんと  
二之回追尚も事を見へるは志賞嘆り其内境



の上へ林中に葛の葉はきたたふと云はれし汝が今日の功大  
なり今より葛の葉の家紋とかなし後裔子傳へしと命

一 孫山 大三 川志

一 元龜三年十二月廿二日

大神志三方系にけり甲州武田信玄と合戦あり

神君仰より依り夏目吉信と淡根城に留守たり合戦  
此期よりして吉信城の櫓より登りて勝負此勢ひとの  
そみ見しと

神君の軍勢利ありと云ふよりけり吉信三方系よりせ  
ゆきし

神君よりやせけり合戦の軍勢をよみてみる味方此旗  
本あやうくみえたり神のけり早く淡根城に城より入給  
ひし後此合戦と約し孫へし

神君宣ひし我城下にけり敗軍一命いきて何かは  
せん其と揚ぐ系より合戦より孫へし城より入ん  
事難かりしと合戦より入る心より討死せんとの我



禰りし馬とて所馬は口伝く事成さるまで命り  
口伝もつせんとなめり

神君いり給ひて澄をあらせて口伝をあらか  
て言ひは我命りしをあらせてまみむる小澄となて  
せき丸孫の事を吉信おしゆきつひく口伝ひよか  
し事成さるる間いりてかていひぬめ其身の馬より  
わりてさるる

神君此馬とて之を諫めて中も成るかりて命  
を捨ふは是正夫の口伝かり進むとて成てすま退  
るるは成見う退き一度は彼軍とて其物のうとせす  
謀をめぐりてゆりて勝と全とせんとも成りて大将  
の口伝を口伝するもやい馬とて漢松り入給か  
し事

神君仰せは我爰に有事成りて志まて第一ありて  
退らぬありていありてその口伝りていりて成りて  
口伝きりては吉信かきりてやせりてわらき事



ながし御諱とむかひてそめり後には討死す  
まうは故うもろたうりさやせか

神君はうかつき孫さうし吉信あう山馬より返  
て廣松もむめめはるる鞭と何てさくさくらまじ

神君やむ事いぬ之孫もい城へ越まめらおらふた  
めいも故雲霞のふらさるせあまの吉信も都れ二十

み孫と下知てめせかめ我は是徳川  
家康ありと大言よ名宗と六款を承らひてむかり

うあし吉信十文字の鎧とあく款れ中へお入るは下  
二人の款なつき殺し其身と討死してけり討く六十五  
業から其法き後へ其ともう家さあうして討死せりけ  
ひの関り

神君もてう城へ入給ひわは款うてて遊ばあ  
おらまう其後

神君天下に統一統志をよみ後吉信の二子信次吉次をりて  
作せり我あやう此州の令とのうさく天下統治



いふはかみちの父の忠告に故ありと申威の作あり

貞享五月

長左衛門書上

一 権現様遠州味方ヶ原陣中よりき所へ申前迎へて暮

目次節在る 英時柳助九郎は依仕討復月次節在る 幸中

は款迎へて遊信なる我未討死して仕はる間へ其方の馬を

牽込へて城へ依仕る依定の申へて助九郎は馬を牽

込へて力むちたりて二ツにツキ以て得た助九郎は眼もあ

ぬとのしよと言ふ為に死にけり申すは馬を牽込へて

込ては由申上意は得て助九郎は頼り申すは幸立淡松の

城へ依仕門ありと申すは城へ入るは善し其意二に成り

た免中に身殿様は依仕助九郎を頼り申すは討門のくま

り申すは馬を牽込る名ふて申城門へ入る即刻

は城外へ分て仕者依仕る意うけ出見及中道言上は

其難の申上言上は腰の巾着子も頂戴し申すは海軍

故の扇子に地紙たるをとりてはう奉取持難有志なり

幸存の紋へて用ひ奉

貞享柳

助九郎書上



一 三方原放軍

神祖己よして濱松に到りて西門より入る  
孫のりふ思惟の今に寡兵来てゆふ我見は我軍  
敗績とて騒擾をんとて垣より入りて  
門の守者寡をなれを怪しむ敢て門を閉るは味柳  
武重大く呼ぶ味柳助九郎  
公は供きしと来る門を開くし守者潜りて門  
を閉る

神祖入城あつて武重を命じ我れを巡行せしむ武重  
帰る毎事かゝりて告む

神祖武重の功を賞し以腰に扇子を賜ふ以扇子を

濡し紙破し骨に離れたるを海領す今に到り家

よ傳へ家紋となす

四戦  
紀聞

一 三方原合戦放軍

神祖濱松に城を退るを孫山内之款一人来り弓矢を

掛け



神君と二三回のもよ編め討落しとせんといふ事な内藤  
曰希な事比其かゝると唯是れ彼者曾くついでし弓園月の  
如く引たため既くかゝると見へたるは一月内は是非な  
く矢表しとまゝ身とつて楯とすゝる如く打落し彼款乃  
後より天野之節無湯原景馳来して馬より款れり切了落  
しを款討して首取取ふ  
國朝大  
業廣記

一

信長公は生害れとまゝ  
東照神君泉州場より西退ひ此討成をむさ記出立にて

樂内共よとまゝしてしも生取しては年あたると忠臣一先  
のまをりし連くは越又先よりかゝれとて追利乱妨  
は着き者の事なり征父をたつとて越は有人質公に  
おぼやかし共もな〜穴山はははきかゝると忠臣一先  
かふ出立ぬしも信長討るなり  
神君信樂へは越りしも木戸を平手申へ通すはしき体  
なま何ともいへしとて長谷川ハ  
神君協へは越りし信長より一先は是とて初ハ誰の居



とりのくも志は心供よ長谷川の竹糸一多羅尾の居  
城より筆とす出〜多羅尾を信長と出仕よ竹糸次  
かり遂く在不足見すけ度初く通ふをいして心行候  
と出〜ヶ括〜とあまは多羅尾門を云〜き心一宿あり〜  
〜地走とみか中其方の疑も有候きがて時久八を  
運く進〜桶く赤坂と〜きす

神若とと外供され〜も外茶園〜並居九り〜  
赤坂を持糸す〜に〜き〜つら〜なり〜翌朝早く出

の時久八清供道まで〜久八野伏の籠〜中も隣心と甲村  
〜も願〜多羅尾の中〜〜き〜久八ま〜  
〜とは心供やた〜八某と目掛して甲村の若〜坊〜  
〜孫の清為〜と〜と〜泉坂を〜  
〜ヶ括〜と〜に金子を持〜〜誰〜前  
用〜達層き〜志〜の〜として金子百枚取出〜  
あ〜一枚〜焼〜入〜と〜け〜感〜久八  
〜十枚下〜度〜思〜忘〜な〜と〜一〜







系下ぬ伊勢白子より舟にる三州一哉の永井右邊  
小沢瀬多湯かこ水姓にけし休ま仕く三州大沢へ分寄方  
く心船をく折々一泊しては船をいふやうとある時向の  
地にて若男五六人何れん談合れ侍なり

神君六人の外は家来なり其申の裾をつまけむの  
十人半干深へ花込け方へ来るは家来をいふ由のい  
と志く心舟く清下向志く申なり内へけむ心船は  
ともしあらうとして浦をいづとも見出さぬ大の浦

舟と不審くとの

神君と見付清遠く出るものもなり心船進くあらう  
路より見知らぬ系よりかこく大船に心船より大  
沢へ去る心船をいふ永井右邊親平右邊の侍より堀  
わを早し海に方へ川ありて者よりそまへ入る初め  
れは心船より清遠あり心船よりそまへ入る初め  
心右邊瀬兵衛大沢の若かりて休息して清遠より  
系より心船より清遠あり心船よりそまへ入る初め



何れ收ひしより即日見付んとて三方此後の極切を死  
越内入を付とあり供忠誇にけり内この面乃金子  
成穿鑿ありは百枚以内十枚は多羅尾の場は八十枚  
有し一枚不足はつらつら右近衛を跡より上して  
九十枚の教合たらちむなり多羅尾に従方と謗せられて  
終く立身しありと云いけり泉州根より京河上なる  
さうきとして枚方ゆきし越れしき茶屋に中次郎京より  
系信長公生害れり言上り大くお驚京河上り本徳也

れ境跡より手腹めさしんとして上り本多中務痛誅言ま  
し三州河下に免不道なりお尋れしに伊勢越しぬか  
て花と茶屋より東津川へは越たるさる茶屋と云れ  
儀を三河河上より作し京河へきやうら本多中務痛  
分別故り三河河内ありは中務少輔と感し河井金  
尉石川作若守も亦老幼の共ありし時と尚りと案いて  
中唯一筋り京都にけり後めさしんと思死せしむ

永日  
記



一 權現様天正十年六月二日塙本成清立付信長公の  
御禮に先口本多平八郎遣い

權現様塙本成清立付とて来りし所下下何れも我  
強我弱も上本能寺に付喧嘩を以てかゝ致し候

又付

權現様御供へ礼も常々存じ候に信長公為明智切  
腹の拙子

權現様口為下事上茶屋田部次郎宗よりか尻子宗宗

候に御感れ候も本多平八郎遠山中信長公切腹の拙子

田部田部平八郎中候に付平八郎田部成石連石海

權現様右に候事の上り候に信長公に以て成清入親に

故京都に上り吊り控申合戦に付て付本能寺にて

可き控申切腹の旨に信長公に先角に成申に候に則

系於て是向中馬右に候に付候に信長公馬に先口酒井左

衛尉石川信春も榊原小平吉本多平八郎系に交り三ノ

石平八郎は八郎と申候に成候切腹に付て申す葉



侍れども来ておとすは梅のこゝろ

権現様かゝるの沖切腹は無効辨ひてゝなほそよりけ國へ  
なほお海に敷け搦長舟申は控所合戦してわづら本を  
なほ若とのうねれまや上りゆき何れもやん隠病の似中  
たる病くくしとも旅本能寺

権現様なほけ切腹はく一箇に平八切腹の仕のようぢや  
交在處耐常のいけ後一腹も取極まは年寄の控の公付不  
中候は面目のいよう一帯右四の氣何れ同心あるよる

しつはくくちの居ぢやい

権現様なほ成清出何れ何れと馬よりれ居ぢやい  
しつはくくちの意度なほ成清のしつはく

権現様も沖馬よりしつはく何れなほ成清の耐右候  
平八の通しつはく

権現様なほ成清思案もなるそより道は案同共ぢやい  
しつはく東の海國しつはく仰出沖馬よりしつはく治田系け方  
しつはく長谷川竹中しつはく信長公重忠なほ法中しつはく我未



是より京都は若上りもかくして下成りの中上は服部  
道喜町斗京都は方糸の哉

権現様は成はり免あせうれと若上り免角

権現様と京都一ツ成はり上り又市馬川遊〜長谷

川〜成はり遊若家中長谷川も其勿新依に〜

成はり上り〜成はり長谷川と信依は二州に糸の

申上りよ月又少川遊〜津田は若上り糸の谷

〜成はり上り治田糸の信樂〜成はり若上り信長公切

腹の依信樂〜成はり若上り我木戸を若上り信長公切の通市

成はり上り若上り免角の打破して下成り通市

権現様は成はり若上り何れも若上り信長公切の通市

本多能成はり若上り持と〜成はり若上り信長公切

〜成はり若上り信長公切の通市

は我成はり若上り若上り若上り若上り若上り若上り

若上り若上り若上り若上り若上り若上り若上り若上り

若上り若上り若上り若上り若上り若上り若上り若上り



通るも我亦案内二り川中より竹葉内中よりハ平候本戸に致  
すも多羅尾を出地走中上多羅尾不事し申膳上ふ  
為し候矣多羅尾より黄金十枚を中より出多羅尾も出  
送りしを出あがぐ近水連多羅尾出候仕多羅尾中上  
はたかぞと連も出候可仕候はるぬと常く申候矣此は  
間我亦清候仕候り自然ぬ候者鉄炮かき申候りと云ふ  
は舟より見よりて舟の中上内  
権現様が少く少く馳走中上結句色めを中上へ付

権現様天下に故を為取の以後かか候候と成中は沙汰も  
なく申のぬと載と煙と関(清出勢州白子より四船より  
は百三州は出載は長田平右衛門)不若小も隠密に潜ま  
船より申迎よ出ふ

権現様清候様不夫形平右衛門宅へ可成入申由はく大  
漢江浦(出右船より)と望川を渡りて申船候(出中)  
候る所成のふは船よりと成出候り(と陸も何と云ふ人  
人百人程を清候り方と見申を候陸候り)と海へ



ちつし舟の方(糸)内く(譜)代(元)の内く

権現極少(糸)成(糸)事(糸)仁(者)く(糸)自然(糸)の(者)あり(糸)あ(糸)

権現極(糸)少(糸)成(糸)事(糸)仁(者)く(糸)自然(糸)の(者)あり(糸)あ(糸)

入(近)く(糸)糸(糸)と(見)中(糸)之(糸)大(漢)地(元)侍(糸)一(類)も(何)く

一(糸)糸(糸)一(糸)糸(糸)一(糸)糸(糸)

権現極(糸)少(糸)成(糸)事(糸)仁(者)く(糸)自然(糸)の(者)あり(糸)あ(糸)

一(糸)糸(糸)一(糸)糸(糸)一(糸)糸(糸)

中(糸)

権現極(糸)少(糸)成(糸)事(糸)仁(者)く(糸)自然(糸)の(者)あり(糸)あ(糸)  
有(糸)也(糸)一(糸)成(糸)清(糸)入(糸)平(糸)存(糸)也(糸)や(糸)も(糸)持(糸)は(糸)方(糸)く(糸)地(糸)と(糸)夫(糸)く  
地(糸)一(糸)方(糸)に(糸)く(糸)地(糸)は(糸)も(糸)

権現極(糸)平(糸)存(糸)也(糸)一(糸)成(糸)清(糸)入(糸)平(糸)存(糸)也(糸)や(糸)も(糸)持(糸)は(糸)方(糸)く(糸)地(糸)と(糸)夫(糸)く  
有(糸)也(糸)一(糸)成(糸)清(糸)入(糸)平(糸)存(糸)也(糸)や(糸)も(糸)持(糸)は(糸)方(糸)く(糸)地(糸)と(糸)夫(糸)く  
地(糸)一(糸)方(糸)に(糸)く(糸)地(糸)は(糸)も(糸)  
糸(糸)成(糸)清(糸)一(糸)宿(糸)望(糸)口(糸)是(糸)傍(糸)一(糸)所(糸)取(糸)城(糸)退(糸)付(糸)吊(糸)口(糸)合(糸)戦(糸)の(糸)一(糸)所(糸)也(糸)



備へる米米浦出馬の事より北條家右へ括子おつて八割は万  
にらへ出申は友浦上落の成生への中  
貞享永井  
万の取書上

一 天正十年六月四日

家康公伊賀越と成白子の松浦へ浦出打首松坂の間  
至七郎の松坂成は若松へ惣居柴と賣其船と  
備へりしと成信の事も松坂賣仕思て成信と申し  
本付松坂代々下りしる早く船へのせ出へりしと成信供  
中込路系松坂代二増信金下柴は海上へ捨ふぬ飯を

かきかへぬ船中成松へ麦と米と二つを炊きぬ飯と上  
ふ舟は定概より上る米はかきかへぬ専捲れ塩辛いして  
上る殊の外風味よくとては飯と之を上りし時の外は感  
あり今世まで同座よりかきかへぬの塩辛軟上佳例なり  
け付山約束とて今同座船もは運上とす  
武志  
雅談

一 天正十年六月末塚浦へおつて成信成信屋を以て成  
信はこゝへ境志見物成信の旨を仰入六月二日へ塚山立  
浦上落先へ橋本多平八郎と成信の其日塚と云へり上り候



まゝく茶屋に所次席系部より高鞍馬より系東道にけり  
多年八月遠引して信長に他界せり  
我信ふ平八席四席次  
席より系返す

公版盛心逆巻いて掛け目いふあ人のあひごと  
成只事とあらはる供は衆中ハ七用の口音はけ馬と  
照へ山系の手酒井左衛門尉石川伝老馬榊原小平吉井保方  
ふ代大久保新十席清前より有て又信長より  
為案内者長谷川村井岡乃は所前より遊れる何れも

多事音か

公これ仰り信長の情懸成りゆりゆり上々智慧院に  
遊版をて成成れ名お行を續して仕の音何とけ候り同  
してゆりは平八先して系れ中平八席四席次郎清先  
系山伏の元太の揚子を見て只事にはあひり  
にけり乃中里程さくまハ又系返して右のあ人の座をよ  
この事若者れ中あもやとて思召はるも智慧院にて  
心腹めいり勿論たも版て仕信長れ山系公ハ遊後



成事一亦成程之州一亦成法居美於西國信  
人数を催一吊合戦成りて西討死はいつと海一  
候しんや一亦中時在衛尉一考してけ分別りかき元  
おろかり事佐老考拙者之分不れ故不ひは

殿一亦上として又傍一亦為考け格子左衛尉佐老考  
中上候

公此仰り今西國吊合戦に一討死しん事一智恩院  
亦て追腹しけしん一ハ雲泥遠と一とも併の者追け

ん一めて上落しひと三州まで系しん事か一踏次  
て西美の夫一りしん一ハ亦考ひ格一も時お行  
中けぬる意逃腹信しん事勿論と一も款と一今  
か考一亦ぬり一亦考念ひ一もけ筋大と一我一取つき  
し一亦考若に一亦考つと考乃一も考意の通一可候  
亦考時家老元一固一亦考事一も亦考三州一亦考  
り格一も亦考併の亦考中一も亦考一亦考亦考亦考  
梅若齊一も同道り一故是に一も併代界れ格子亦考併



お竹より津田へ書越は信長に他界故

徳川家康と場より三列に筋越は奥内共越中にて

有使ふいとひくく馬宗二騎来て畏い由あり先

に成宗より田代を馬宗へ送くるも我々も先ず川口にて

つと柴つと船に下舟と便船りしとて舟より

宗へせき船をたてし供の元と云お遠渡中穴山梅吉

は思ふ心より一里程に於て我人教本にて越りて又御へ起

て一人のありす討殺し又津田の奥内共共の討

と梅吉若くも一里程に於て彼若く討殺し右近は共々も

梅雪返す討殺し候

権現梅の市用より立若くも十人程有馬湯治の心腹にて

時中供より右後より南より馬宗の心腹中より討殺し候

して宇治田原に近取口より使と共一宿をぬり志がき

入湯出る良尾前にお竹より使者と共越りて右近より

此能の旨は門外より遠より右出の多分尾宗共と討殺候

右にお竹八人の外は供共共討殺し候



お竹より津田一帯越は信長に他界故

徳川家康と場より三列に筋越は兼用者越中にて  
旨は来いといひく馬宗二騎来て畏い由あり先  
に  
松宗系田作在馬の走くるをたやえくおす川より  
つゝ柴つゝ船に下舟と便船よりくちて舟より  
宗とせき船をたしてお供の元と二番お遠海中に穴山梅言  
は思ふ心より二里程のり我人教本にて越りて又御人起  
て一人のありす討殺し又津田の案内者此の付

と梅言者も二里程のりて彼者と討殺し又進めは若くも

梅言教まゝ討殺しし中候

権現様の所用くまは若くも十人程有馬湯治の口喉中け  
時お供よりお後く南く馬の口喉中よりお成り然  
して宇治田系に近お口の不へ使と多き一宿をぬり志がき  
へお出多良尾取お竹より使者と多越りて又尾取にて  
お能の旨はく門外に遠くお出い多良尾系若く多討候  
おお竹八人の外にお供は若くお出い多良尾系若く多討候



の内へ推入しつゝ不入しつゝ門を以て然るに伏せぬ末は  
成つて居たを以て廻り内へ折入りて吹く所膳を以て  
後門を以てき未成り出に伏せぬと馳走す多程尾  
を以てして過堂しつゝ伏せぬと吹く所は我未候中は小  
姓を以て所近に居合致しつゝせしめと出に女より所  
権取極やすき故に以て女作付黄金十枚お竹の前  
とくそ程にふ入して二枚を以て残に返し小姓を以て  
しつゝせしめしつゝ女作付物に金子しつゝ何と吹出させ

此伏の所しつゝに武枝罷渡腰し付しつゝ女より作付  
と極く勢別神戸しつゝ女作付し付しつゝ後山母候より三度  
女作付入しつゝ女細し女信 白子の  
巴市 女より作付  
し三州大渡しつゝ女作付し三州遠あけ各山平しつゝ彼地系  
を以て目候の所しつゝ落後故為別本多百助と共し  
し甲州へて系し女作付しつゝ甲州先方名を以てのりし  
女作付しつゝ女作付しつゝ後山人殺催しつゝ吊合  
戦の以用しつゝ尾州の所しつゝ女作付しつゝ女作付しつゝ  
明智と勝



新寺表に合戦し馬市夜陸より長小栗栖して  
突殺のりし間多成淡松の馬入六月十六日於甲府百助  
寝不川尻肥前へそ成殺のりし中來いよ月く  
中人教とを

酒井家不  
藏齋記

一 柳の津也遊覽れあす一京本陸より信長生害いそく  
依し即務とませ給の家へ等し味をよ渡の長谷川林丸  
おびく守として伊奈伴勢と使して長崎へ還入あつて

こし中治川をむりめ時く川の激知るるのふかり  
あま酒井丸傳の尉忠次小船一艘と求りて  
権現柳とのきも舟人毛候とて別心腰物れ並  
成場ゆ家へも忠次をまめ馬に治川を  
くく舟中船をよるは心奪通れ神谷小伝よ小築成  
舟下山尾天濃も景隆共舟對馬も系作激回より馳來  
て守りながら中治川系れ人蜂起すけ不具彼大明  
神の社あり別當より入市別別當服於天法よ案内



て仕りし心証あり彼別當家(を)催し心中せしむるに  
業内仕り(野伏等)皆別當より親しむる者悉く雌扱す  
かくて江別信樂連別當貞信侍事しけり不代より多羅尾  
四所兵衛光俊の願知あり長谷川竹九多羅尾の旧好あり  
か)

権現様此の難儀と告り是は光俊別家宅より入るる腹  
部別當の忠志誠感し尚座の心懐羨しししししししし  
國次と賜ふ後、淡松(糸向)新地百六十石毎領し一家入

と成り是生國江伊州よりて之を東武門より今此服部  
久左衛門同来女より先祖よりて此領に清腰持し今所持  
す

権現様多羅尾の室和より表の御堂ありし渠も業内より  
て伊州拓植しりし也あは右に拓植し先法藤岡百助宗  
次同傳多羅尾官地不兵衛或は権現也米代半助より信長より攻  
められ民も自ら儲け居る者も質し出し略次一揆進  
拂ひ仕座麻伏免越進下等送此音有け面し其外伊奴



の浪士或百人を其儀に及して其途より帰るる事  
人亦皆従ひ其志を遂げんとすなり多羅尾今本所を  
は伊賀の國と送りて其儀に及して多羅尾今本所を  
其儀に及して其儀に及して其儀に及して其儀に及して  
伊次郎といふものの我の船を寄る事今本所後孫惣持を  
其儀に及して其儀に及して其儀に及して其儀に及して  
て三州大澳より伊賀長田平右衛門重元も逐我宛り  
多羅尾今本所に答書す  
右近左夫  
重勝の父 三州の浪士も逐我宛

意を以て其儀に及して其儀に及して其儀に及して  
て尾列の動座の時伊賀に及して其儀に及して其儀に及して  
とぬふ 續武家  
閑談

一度長江年二月十七日伏見江御所七日有馬法平方に伏  
見よ其儀に及して其儀に及して其儀に及して其儀に及して  
内府公も其儀に及して其儀に及して其儀に及して其儀に及して  
内府公も其儀に及して其儀に及して其儀に及して其儀に及して  
内府公も其儀に及して其儀に及して其儀に及して其儀に及して







出 戸田方  
の書

一 慶長四年二月十九日、有馬法正、下河原の陣に乱る。其時、井伊直政、少米、周旋して、後、早湯、河原、山崎、及び、常陸、佐渡、等、佛、系、に、おん、これ、侍、候、合、を、夕、夕、夕、伏、見、中、難、況、は、ち、く、に、い、  
関系中陣  
前ヨリ之書物

二月十九日、夕夕夕

家康、直政、の、治、方、大、將、に、く、取、る、中、は、直、政、治、り、て、俄、乃、事、お、ま、り、た、り、直、政、は、角、く、も、枝、木、石、持、が、く、に、く、繩、か、け、

の、美、倉、を、奉、今、や、く、と、心、掛、け、時、中、井、大、和、も、本、多、三、郎、中、談、は、直、政、は、内、と、し、め、信、長、の、働、役、に、く、も、家、(大)掛、ら、し、烟、の、下、に、く、果、は、り、ん、口、端、を、奉、人、殺、来、り、お、(大)掛、と、い、り、兩、人、菟、山、城、の、大、和、廣、庭、に、治、方、腰、を、か、き、下、知、せ、  
ふ、  
ふ、

家康、内、の、者、降、来、人、と、名、宗、系、は、り、屋、鋪、の、指、子、と、名、は、為、し、呼、出、し、可、は、即、ち、い、し、付、支、人、は、内、へ、来、し、も、能、掛、治、方、は、指、殺、す、事、定、り、し、も、其、夜、不、取、掛、望、り、し、り、世、上、の、体、は、な、く、



愛だたる事もふけりて屋浦に表よ長屋と造りてハ  
意外として表と垣筑地ふりて内よ長屋と建つけ騒動武  
藏(吹)中家へ共地よりなれ森の前井仔兵部少輔屋浦  
あり上りはき屋浦中へ旗指物にけり三日師でけり付

の事あり  
板板下  
赤巻書

去り長屋に表よ奉行一同して

家康より疑ひ背く伏えし屋館とて攻めの密談あり  
流云ありふりては伏え大坂騒動へ男女多々厚く遠里

よ進隠し如水長政に兼てより悔よ

家康より志保ありけりけり騒動に折首先長政を士  
二十人許り具し

家康より屋館へ伺候しても後きし

家康の甚感悦し給ひ雅説出来てより今述うがよ志  
保き人又頼もかきあよ一あよんを傾きて我より興きり  
不幸誠よ志保の志を成ゆり作悦の余り長政のよ我れ  
五項より給ひたり附記曰



東照官長政のよき心頂き給ふ事より後凡之度より  
も位は清きとてかろく一に格よき内事とてかろくは馬  
一其事かろくといふ人もあつたが、あつたに言はれり  
おとよみぬ君れい人の内格一に斗て雄一戦國の時のか  
い今れ世より推して知るか、一三畧よき將れ法を教く  
英雄の心と云といふ事故志あり一石より上長政の忠告存  
き志は感一悦ませ給ひて戒の心志深きを成しとて  
今更其志を享ふ一とて記せる事は思ふ事あり一と付

ゆれぬて見き、一輩れ語り傳へ一事今更疑ふ  
毎ににも有るれを捨りて一記一付る

星田  
家譜

一 慶長四年春林系式次大輔并伊直政と交り伏見を去  
のため江戸を去る事ありは諸侍と同なり一と伏見に在り  
むく交り尾州熱田に在り一上方騒動一と告げ申すより  
早るよ事勢一臣族の境とあり一在登り一山原を一系上  
一と乱舞の候とていふ前一に示しあり

家康公より神格と見覺はれ感懐多しと申す事自願斗



越中取極つては康政の事下右大元奉納中より多越ひ  
越つても有極の作少く物定つて休息下仕音の信と  
かり其旨本多作渡守正信等も出同意あり伊奈熊秀  
忠正大久保十兵衛長谷川七左衛門など同為つて伏見へ  
召置せり伏見は度々多て各一騎かけし馳くらま  
近き書れ面くしてとて供居残り市に付て上下は四座  
あり居りて近きは町屋又々を坐の民を借り  
て各止宿つては付相くさかの四人救ふれり少法信

とす  
落穂  
集

一 慶長四年加賀大御言利家卿大坂に病氣重取治兼  
色はくす

家康公為見廻伏見よりは出立既く利家此宅へ入  
りて利家此宅へ入るは後より付ては常々利家長今朝  
より馳走の儀中付ては五答なり  
家康公利家此宅へ入るは後より付ては常々利家長今朝



の力と出〜利長はせ〜と方必はたさや〜中たさよ  
美量あつ〜返着はは列

家康は成分り教〜た〜天下の事なるよ不  
下有〜事あり〜も〜也〜若き〜人〜然〜と〜人の

入魂に〜は〜大義は成就せぬ〜の〜方事〜と

家康は〜〜教を〜れ〜未だ後〜〜た列衆有〜

天下の頼り

家康は〜〜入魂〜〜事〜と〜た〜と〜た

公程閑  
服雜書

一 慶長四年前田利長以外は存命不定ふり〜付し

内府公(對面)〜度旨〜とら〜依〜利長宅(内見

辭〜成〜由〜出〜控〜と〜推〜出〜共〜か〜

内府公(利家宅)信〜討〜と〜の謀〜由〜とら〜との

あり

内府公(信玄)利家此〜底年〜東出〜知者〜た〜信の表裏

者〜も〜不〜と〜同〜月朔日彼老〜出〜成〜浅野左京加

之斗亦信跡より〜事〜



内府に門違馬駕樂方系主平吉人の八歩引きて一町程往  
跡より伏見に陣をとり系主の利家上下に侍り居る掛  
同我未死後より利勝後改少川系主下候格と云ふ事取  
由中

内府に請高渡りし公易存心格とて以来出入魂て有る旨  
心意の附利家渡り流しを合せ存心事と云ふ由一札中

上候 戸田方  
門差書

一 慶長四年九月重陽に御禮より御登城成り付候も御供

の礼も大勢取中候御供の系主は御極の門まで皆残  
りしとて御供も不揃系主御城より奥へ渡り候所  
頼公共御供候御極の御對面の次は御連小姓九年御供候

御供候系主  
慶長見  
御書

一 秀吉公御他界以後或時右田治於少補中候何とて

内府に云々たる御供の御供も加賀大納言を夫  
とて御供候御供者なれども同と不入

内府に云々たる天下も御供の御供も



德善院に居合少中候て堀尾常力及一畝一畝中  
治部少人にとたご一筆裁むごとく世中より右に拾子  
裁語一畝中より常力及細川越中守及一語一畝中  
越中守及常力加賀大納言及一畝一畝越中守及  
右に越具一加賀大納言(清物語成りゆ)  
権現極遠馬車中より其初御堂城に極遠馬車用心成  
清供より忠勝極并伴兵於及糸の極よと一任付清上人  
六供より成り(何れ清別條より清上人の極よと一任付)

権現極清巻下方(清廻り)極遠馬車同四方に方悦し清上人  
の去案より下方より入るたより裁中實に成身の方にはと市付  
候る末末共より一幸一幸より一幸一幸成り候一礼と清巻  
取れ方より右より直より裏山より一雨退出極遠馬車由定よ世乃  
愛に無一と裁ゆ  
清神若極より(右思心難し)極遠馬車極遠馬車一是又兵法  
よ一人かき地を約し中より道程より極遠馬車極遠馬車一在施

源兵衛清物語伝

本多家武  
功開書



一 九日朝より中務牧野右馬允ふくむ迄之りて大別  
の侍大将十二人其は何方連も

家康公侍居座此次のる所より伺ふて致す外侍使番元  
人其は四玄園止りて在り申意にして以上十七人其供は右連  
らら既に侍出れしき様の門より番人中より其供の元  
候よりせしむ少入すに突一心上ふと侍時彈正侍連  
其出而挨拶申上例の如く申先口立りて上る

家康公侍の其供は元右連より侍居座は右連より其供に  
居りて其供よりして兼ての積り相違りて土方大野も其月  
通りて其供は右連より侍居座此次の間より右馬供の  
衆中其居座は其供より其供より其供より其供より其  
外此成人かまれば其息は見えしやせし是千秋万歳月出  
度此事

家康公侍の悦ぶ能定度一も侍は上仰入り其益相海  
頃より侍立遊りて  
岩淵夜  
話別集

一 慶長六年六月石部山泊りけ時長東大藏



内府云城(ま)入討中々んと謀(せ)世るより(り)以難説  
あり(詰)入申度(と)有て大藏父子上下に(づ)石出三所  
之(は)藥(り)付(る)越(は)は淀(さ)なり其(其)石(石)於(に)水(水)泊(り)る  
水(水)供(り)る石(石)連(連)は(は)清水(水)権(権)助(助)戸(戸)田(田)金(金)左(左)衛(衛)門(門)花(花)井(井)左(左)衛(衛)門(門)右(右)衛(衛)門(門)  
奈(奈)左(左)近(近)守(守)人(人)及(及)記(記)者(者)九(九)出(出)與(與)の(の)廻(廻)り(り)仕(仕)事(事)以(以)日(日)追(追)存(存)生(生)少(少)  
詰(詰)も(も)事(事)あり(り)三(三)何(何)と(と)相(相)語(語)す(す)又(又)女(女)系(系)物(物)も(も)石(石)中(中)  
以(以)為(為)し(し)少(少)事(事)為(為)通(通)ひ(ひ)ふ(ふ)と(と)い(い)ひ(ひ)説(説)有(有)り(り)曾(曾)て

内府云此(此)清(清)心(心)と(と)不(不)知(知)老(老)れ(れ)推(推)量(量)なり(り) 戸田(戸田) 覺(覺)書(書)

一 六月十日

内府云は石(石)於(に)止(止)宿(宿)なり(り)附(附)は(は)水(水)口(口)に(に)城(城)主(主)長(長)束(束)大(大)藏(藏)  
伺(伺)ふ(ふ)て(て)明(明)和(和)水(水)口(口)に(に)於(に)て(て)は(は)茶(茶)飲(飲)も(も)ま(ま)た(た)度(度)中(中)に(に)上(上)り(り)と  
内府云(云)は(は)石(石)口(口)に(に)は(は)心(心)腰(腰)の(の)物(物)と(と)な(な)り(り)後(後)め(め)く(く)式(式)飲(飲)大(大)  
補(補)康(康)政(政)以(以)法(法)中(中)上(上)事(事)は(は)南(南)時(時)れ(れ)ん(ん)半(半)鐘(鐘)に(に)詮(詮)か(か)き(き)し(し)事(事)  
か(か)り(り)し(し)や(や)ら(ら)し(し) 内府云(云)は(は)信(信)明(明)和(和)の(の)時(時)是(是)も(も)仍(仍)る(る)に(に)其(其)數(數)は(は)石(石)部(部)に(に)止(止)  
宿(宿)なり(り)然(然)ふ(ふ)に(に)け(け)日(日)は(は)列(列)作(作)和(和)心(心)の(の)據(據)よ(よ)て(て)乃(乃)左(左)近(近)の(の)石(石)田(田)に



威不効ありハ

内府と東下一しては存小部一今軍兵漸く去  
百八ふく又けりより石部連七里勝かり二千れ兵甲と  
以て其之陣一して蒲生備中に二の月おれせし石部の者  
夜前後より焼立敷ありしと一然不討と十五一七八  
と是非猶下一といふ時おれは敷立のハハおれ付一  
といふ石田三成とて疑ひれぬ者ありといや一は快  
てハ甲一と奥刀け人もおれ一却て尚城一押寄たりとてハ

叶ひ部一して決せし然しも大近頻く用たり一はア  
関原  
軍記

一 慶長六年六月十日

神君景勝は征伐と一して辰上刻伏見と後一給ハ年此  
上刻大津の城一合駕と程一戦博之系極宰相高次合膳  
致款以然一して今日より倉津の役も從ハ大小存退一  
大坂と敷す

神君今宵は石部の款一清止宿あり一といハ諸軍も是夜  
守衛一も不けりハ長束大を痛くする候一して向於餉



居水口も松ヶ嶽一度の由願屋へ

神君二里に於て神の志がわが答を以て紙にせしむ

舟より命をたれ長束の物一箱の玉杖成の刻俄に石が

と出陣近きれし少く携へり竊に水口と云ふせしれ路

次より渡りて守網と名口一度より係り確と云ふ給

ふ事一出来候ふに四つもたせしれし由仲事と云ふ道國

光の照るに賜りゆふと云ふ長束は之成に一味もく

虎根れんと候むと云ふ保斗齟齬一且けり漏りて去る

か大く思懼して十九日れ朝守網にお供へ水口と出路取

放り井俣並改く便りしう異ふかき有るは成陣防も

神君二里と名を以て侍一五く足下野へと合む由故少し其り

こいつれ急用ある所約と爰して駕を委りて有慙勤の宣

ひかして二里の大木を以て去はる送る事し其と云ふ水口

ゆりきり今十九日れ宿は関の沢かへり河川の住吉川に其

あがて休奉

君は下向は後長杯は仰仕ふべきやと名を以て宿の宿へ



神君御笑と命とを為居る下知は従ふつと由命あり

こ下平杓の後吉川と名出され二百石を賜りて内代官と

かり石部は住居

今於水口城に入河ふき平高時流布も其所の  
偽書一其説あり我ふとて未実録に於

正説と  
見す

供も佐和心も籠る石田治於補三成り謀長柏原平

助於江表助等ハ其後時々然しは石部と國の地藏れる

に於鉄炮とあり

内府とありもんとのとて時と噴むとて

武使安  
民記

景勝は退治

源君下向石部より水口と敷通るは越のよき惣勢は若

の下緒に火城らとつちて通るとは作付後水は沙汰

?

権現様の鉄炮の数をぬもたむとて

武功  
雜記

東照宮清指の中甚大なりなり年光とせありては居伴

かこくおもひまは若き時より教度の戦い初の程々

庵に下知とて給下も事急かれ及て是れと

は奉に鞍の前輪とたつとせ給ふは血流と出らかり



六十年事歳度々々々々々々々々

常山 紀法

一家康公右左衛門の指中卿一曰ッガガたあま成り一軍よ  
らせられては程々々々々々々々々々  
くは在り附見小性家内より一軍と付とやかくと申て見  
て一寄持向す一軍考たら衆の中と申す

家康公は若き時より一陣の度毎々合戦初不時若初乃  
程ハ清米記に云く一軍知かたふと云く一軍急々成りて  
かま〜〜作られは春成りて一軍の希痛と云く一軍のた

一軍らあつて五月清指持ぬ〜〜血流出るは陣中  
とては由藤治と云く一軍も一軍未愈々は内より又陣  
中あま一右左衛門と云く一軍に付清底破る〜後まハ  
甚し痛ふと云く一軍も其致は除てはあま由是成り  
すま故あはれ〜成り指つきに一軍為成り〜と云く一軍  
審晴り〜と云く一軍大板隻れ陣中一軍生れる大少の合戦  
清達一軍四十八度〜と云く一軍傳弄り〜と云く一軍  
一軍

岩淵夜 話別集











